

イギリスにおける柴田日向守

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

45

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

84

(発行年 / Year)

1999-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006969>

イギリスにおける柴田日向守

宮 永 孝

慶応元年閏五月五日（一八六五・六・二七）、外国奉行柴田日向守（剛中）は、横須賀製鉄（造船）所建設の用務をおびて属僚とともに、横浜よりイギリスの郵船「ニポール」号にのり、フランスにむかった。柴田がフランスにおもむくときに用いた名刺には、

SCHIBATA HIOTUGANO KAMI,

Gouverneur aux affaires étrangères, Commissaire du gouvernement Japonais.

と印刷され、ときに「大日本外国事務奉行兼理事官 柴田日向守」と自署した。

柴田一行の特徴は、外交使節というより、むしろ“産業使節”の色彩が濃厚であり、従来の遣外使節のように大所帯でソロソロ出かけて行ったわけではない。

当時、大勢で海外に出かけると莫大な費用がかかったし、経費節約とスピーディーな事務処理を目ざすあまり、一行はごく少数の実務型の随員をもって構成された。

外国奉行兼理事官	柴田日向守剛中
外国奉行支配組頭	水品 ^{みづしん} 葉太郎（梅処）
同調役出役	富田達三（冬三）
同調役並	小花作之助（作助）
通弁	塩田三郎
同右	福地源一郎
柴田の従者	休左衛門
〃	藤井万蔵（パリで病死）
〃	岡田摂蔵
小使	平七

計十名

このうちこれまでに海外渡航の経験があったのは、柴田・水品・塩田・福地ら四名であり、かれらは遣外使節団（文久、横浜鎖港使節）のもと随員であった。

正使の柴田剛中（一八三三―七七）は、通称貞太郎といい、文政六年一月十七日江戸小石川に生まれ、のち昌平黉にまなんだ。天保十三年（一八四二）父・良通のあとを襲って徒目付となり、評定所留役助、同留役などを経て、安政五年八月外国奉行支配組頭となった。

文久元年十二月、遣欧使節・竹内下野守一行に組頭として随行、開市開港延期をもとめる談判につくした。帰国後、外国奉行並、四年一月外国奉行となり箱館に勤務した。

慶応元年（一八六五）閏五月、横須賀製鉄所の用務をおびてふたび渡欧し、同二年一月帰国。慶応三年には大坂町奉行、兵庫奉行、外国奉行を兼任し、兵庫開港、大坂居留地問題の解決につくした。

大政奉還後、慶応四年一月、職を免ぜられ、同年四月隠居となり、上総国山辺郡にしりぞき、のち上京すると、東京淡路町に家宅をもとめた。維新後、新政府から出仕の要請もあったが、断った。けれど外交上の諮問にはたびたび答えたという。

明治十年（一八七七）八月二十四日、病死。享年五十五歳。

外国奉行支配組頭水品楽太郎の生没年および経歴については、あきらかでない。文久元年十二月、遣欧使節・竹内下野守一行に外国奉行支配調役並として随行しており、今回は二度目の渡欧である。

外国奉行調役出役富田達三の生没年および経歴は、不明である。

外国奉行調役並小花作之助（一八二九—一九〇一）は、文政十二年二月二十四日江戸にうまれた。外国奉行水野忠徳^{の忠}が万延元年十一月小笠原島開拓用掛として伊豆および小笠原諸島におもむくとき、外国奉行支配定役元締助として随行し、のち移民とともに小笠原に残り、島の管理にあたった。

文久三年五月、開拓中止の命に接し、移民とともに引きあげた。慶応元年（一八六五）閏五月、柴田日向守の随員として渡欧。同三年、外国奉行調役並から調役に進む。四年町奉行支配調役に転じ、幕府崩壊後は新政府に仕え、東京府権大属、東京府権典事（明治5）、内務省地理寮七等出仕（明治8）、内務省権少承（明治9）などを経て、小笠原御用扱（出張所長）となった。

後半生は小笠原の開拓事業につくし、明治三十四年（一九〇一）一月十七日死去。享年七十三歳。

通弁塩田三郎（一八四三～一八九）は、天保十四年十一月六日奥医師塩田順庵の子として江戸に生まれ、安政六年父にしたがい箱館に移住し、漢学を栗本鋤雲から、英語を通詞の名村五八郎から、フランス語を宣教師メルメ・カシヨンから学んだ。

文久三年九月、江戸にもどると通弁御用となり、同年十二月横浜鎖港使節・池田長発一行に通弁御用出役として随行した。ついで慶応元年閏五月、柴田日向守の随員として渡欧。

慶応三年二月、外国奉行支配組頭に進んだ。幕府崩壊後、新政府に仕え、民部省に入ったのち外務省に移り、明治三年外務権大記として特命全権公使・蛟島尚信に随行してイギリス・フランス・プロシアにおもむき、同四年特例弁務使としてイタリアの万国通信会議に出席した。

また同四年、岩倉使節団に外務大記として随行し、欧米十二カ国をまわった。六年に帰国し、外務大承となり、八年ベテルスブルクの国際電信会議に出席した。

その後、外務大書記官・外務少輔などを経て、特命全権公使（明治18）として清国に駐在したが、明治二十二年（一八八九）八月十二日、任地の北京において病死。享年四十七歳。

通弁福地源一郎（一八四一～一九〇六）は、天保十二年三月十三日長崎の儒医・福地荷庵の子として生まれ、安政二年より大通詞名村八右衛門についてオランダ語をまなび、翌年稽古通詞となる。

同四年江戸に出てからは、森山多吉郎について英語をまなび、六年通弁御用として幕府に出仕し、翻訳にしたがった。万延元年、御家人となり、文久元年十二月、遣欧使節・竹内下野守一行に定役並通詞として随行した。

慶応元年閏五月、柴田日向守の随員としてふたたび渡欧し、パリにおいて万国公法（国際法）をまなぶつもりであっ

だが、おもうまゝにならず、日本研究家のレオン・ド・ロニーにフランス語の手ほどきをうけた。

幕府崩壊後、明治元年『江湖新聞』を発刊、同三年大蔵省御用掛となり、伊藤博文に随行して渡米。四年岩倉使節団に一等書記官として随行。七年官を辞し、『東京日々新聞』に入社、のち主筆・社主となり、つねに政府支持の立場で自由民権派批判の筆をとった。

のち東京商法会議所・副会長（明治11）、東京株式取引所・理事長（明治12）などを歴任し、明治二十一年に『東京日々新聞』を去ってからは劇作家として余生をおくり、明治三十七年衆議員となり、憲政本党に入党するが、活躍の機会をえぬまま、明治三十九年（一九〇六）一月四日死去。享年六十六歳。

柴田の従者・久左衛門、小使平七については、生没年および経歴についてあきらかでない。

従者藤井万蔵については、天保三年（一八三二）伊勢で生まれ、慶応元年八月二十四日（一八六五・一〇・一三）パリの客舎（ジャン・グージョン街五十一番地）で病死した以外に、くわしいことはわかっていない。享年三十三歳であった。

従者岡田拱蔵の経歴および生没年については明らかではない。肥後藩士であったらしく、安政六年二月大阪の緒方洪庵の適塾に入門している。

適塾の「姓名録」（入門帳、緒方富雄著『緒方洪庵伝』所収）に、

安政大稔如月十七日 肥州熊府

岡田拱蔵

とある。

さらに文久三年福沢の塾に入り、元治元年ごろ塾長をしていたらしい（君塚進校注「仏英行」の欄外注を参照）。

明治二年、藩政府の誘導方を命じられた（野村兼太郎『維新前後』）。なお岡田には「航西小記」（『旧幕府』に連載）と題する欧行記があるが、これは慶応元年閏五月に柴田の従者として同行したときの見聞をつづったものである。

*

柴田にあたえられた主な使命は、フランスにおいて技術者を雇い入れ、機械類（蒸気および修船用の諸道具）を購入することであり、そのあとイギリスにおもむき、三兵（歩兵、騎兵、砲兵）伝習の教官の招へいを打診する用務も兼ねていた。

柴田一行は、慶応元年七月六日（一八六五・八・二六）マルセーユに着くと、ツーロン視察におもむき、ふたたびマルセーユにもどり、同地よりリヨンを経てパリにむかった。

七月三十日（九・一九）柴田は、外相ドルーアン・ド・リュイスと会い、(一)製鉄所建設 (二)兵制の改革 (三)兵伝習などについて、老中書簡にある要旨を説明したのち、海軍技師や陸軍士官の雇用について協力をもとめた。

八月二日（九・二二）海軍省をおとずれ、海相JUSTAN・ブロスベル・シャスルー・ローバと会い、あらためて製鉄所の建設、技師の雇用、器械類の購入と輸送について協力をあおぎ、同月六日（九・二五）に陸軍大臣代理アルマン・ペイク（農・商務、公共事業大臣をかねる）をたずね、三兵伝習の教官の招へいをたのみ、その承諾をえた。

柴田は、パリにおいて横須賀製鉄所建設の案件をすべて処理すると、イギリス訪問の準備にとりかかった。

柴田一行の渡欧目的のあらましは、その出発まえにすでに閣老より江戸在勤のイギリス代理公使チャールズ・ウィ

ンチェスターにつたえられ、本国へ報告させてあった。

しかし、イギリス側には、使節の本来の使命をかくし、国防上必要な各種の兵器や機械を実見し、さらに造船所や工廠を視察し、日本の革新に役立てたい、とつたえ、その協力を仰ぐにとどめた。

イギリスをおとずれるのは、かねて日本政府より同国に三兵教練の依頼をしており、それにたいするイギリス政府の考えや反応をみるためであった。

通弁方として一行に参加した福地源一郎によると、柴田一行のイギリス訪問は、使命というほどのことではなくて、『会釈上の使命といふに過ぎざりき』（『懷往事談—附新聞紙実歴』民友社、明治27・4）という。

このことの意味は、イギリスを儀礼的に訪れ、あいさつをした程度ということであろう。幕末、英仏の二大勢力が拮抗するなかで、幕府がフランス寄りの外交を展開するのを、駐日英仏公使パークスは快よくおもわず、たびたび苦言を呈した。

幕府が横須賀に造船所を設けるのを、フランス一手に依頼するにおよんで、パークスは心中おだやかでなかった。やがて幕府は、イギリス公使の不満をやわらげるための一策を案出した。

イギリス政府に三兵伝習の教官を招へいする意あることを示し、もし幕府のほうでその議に決したら、承諾してもらえるかどうかをたしかめるにあった。

しかし、幕府は口と心が裏腹でありフランス政府と、三兵伝習の件で内約ができており、その手続に入るばかりのときであった。

ことばの裏を見すかすことができなかったイギリス政府は、それでも柴田一行に好意をしめし、柴田の要件を儀礼上承諾したばかりか、諸所を見学させた。イギリスは三兵伝習の依頼について、かねてパークスより報告をうけてお

り、柴田が外務次官ハモンドと会見したとき、当然、この件が話題にあがった。

ハモンドは、横浜に駐留するイギリス兵に余暇があれば、つごう次第、貴国政府の要望にそいいたいと回答した（大塚武松『幕末外交史の研究』）。が、イギリス側は、幕府陸軍が強力になることを望まず、援助する気はあまりなかったため、結局、幕府の当初の計画にそって陸軍伝習のすべてをフランスに依頼した。

*

本稿は、イギリスにおける柴田一行の約一カ月におよぶ視察の実況とヴィクトリア朝のイギリス社会の一端について記したものである。

柴田剛中の「仏英行」（君塚進校注、日本思想大系『西洋見聞集』所収、岩波書店、昭和49・12）と岡田拱藏の「西航小記」（雑誌『旧幕府』所収）、現地の新聞報道などをもとに、一行のイギリス滞在を再現したものである。

柴田一行は、少人数であったせい、あまり現地の新聞記者の網にかかることはなく、記事として取りあげられることも少なかった。

わずかに『ザ・タイムズ』（*The Times*）紙がいちど、『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』（*The London and China Express*）紙が、二度ばかり一行のことを記事にしたにすぎない。とくに後者の週刊新聞は、いちばんおもしろく、資料的価値も高い。それらは、つぎのような記事である。

「日本の委員たち」（*The Japanese Commissioners*）と「日本からの訪問者」（*The Japanese Visitors*）と題する小記事が二つ（二八六五・一二・二六付）。前者においてブライン少佐が、クラレンドン伯により、日本人係に任命されたこと。一行がそれまでに訪れた市内の見学先にふれ、後者においては、ロンドンの各所、諸施設を視察した

ことを報じている。

ついで同紙は、「日本の委員ら、イプスウィッチを訪れる」(Visits of the Japanese Commissioners to Ipswich)と題する、やや長文の記事をかかげた。これはイプスウィッチの有名な農機具工場(「ランサムズ・アンド・シムズ社」)を一行が見学を訪れたときのことを報じたものである(一八六六・一・一〇付)。

さいごに柴田一行のイギリス滞在を総括した長文の記事に、「わが国を訪れた日本からの訪問者」(Our Japanese Visitors)というものがある(一八六六・一・一〇付)。これなどは、柴田の日報「仏英行」の記載を補うものとしていちばん貴重かとおもわれる。

筆者は、さいわい先年の夏、ロンドンにおいてこれらの記事と接しえたので、コピーを依頼し持ち帰ったが、新資料として本稿のわりに添えておいた。

*

慶応元年十月二十一日(一八六五・一二・八)、柴田一行九名はバ리를発し、英都ロンドンにむかった。同夜、ロンドンに着き、「ランガム・ホテル」(写真参照)に入った。

一行がイギリスに滞在したのは、同年十一月十八日(一八六六・一・四)までの約一カ月である。この間のこれらの訪問・視察地をしるすと、つぎのようになる。

ロンドンの地下道.....十月二十三日(一二・一〇)
大英博物館.....十月二十五日(一二・一二)

ウリッジの王立造船所	十月三十日（二・一七）
陸海軍クラブ（ロンドン）	
タイムズ社	十一月二日（二・一九）
イングランド銀行	
王立造幣局	
ブレークリー氏の兵器工場（グリニッジ）	十一月三日（二・二〇）
王立取引所	
ロンドン塔	
ロンドン・ドック	
保税倉庫	
チェルシー王立廃兵病院	十一月四日（二・二一）
陸海軍孤児院	
地下鉄道	
ボーツマスの造船所	十一月五日（二・二二）
海軍工廠	
海岸砲台	十一月七日（二・二四）
ラグラン兵舎	
ブリマスの防波堤	
アルバート橋	
デボンボートの造船所	
キヤム造船所（モリスタウン）	

ウエストミンスター寺院……………十一月十二日（二・二九）

国会議事堂

ミルバンク刑務所……………十一月十三日（二・三〇）

ウイリアムソンの刀剣工場

ランサム・アンド・シムズ農機具工場（イプスウィッチ）……………十一月十五日（二八六六・一・二）

パテント・コンクリート・ストーン会社

南ケンジントン博物館……………十一月十六日（一・二）

園芸協会

ロンドン・フェンシング・クラブ

*

慶応元年十月二十一日（一八六五・一二・八）、柴田一行を乗せた汽車は、しぐれ模様のパリの空のもと、北^{グレン}駅^{グレン}からゆっくりと動きだした。

汽車は市街を出ると、パリ盆地に入り、平坦な枯野をけむりを吐きながら走った。一行はときどき車窓に起伏のある丘を見、農家、畑、樹林、小川、家畜などをみながら北へ北へと進んだ。

パリ、カレー間、二九三キロの距離を約六、七時間ほどゆられ、同日の午後一時すぎカレーに到着した。

汽車が着いたのは、中央駅（町のそとに位置）か。それより一行は、おそい朝食をとり、一時四十五分ごろ波止場より対岸のドーヴァーにむかう蒸気船にのった。

ひえびえとした、波高い海峡をわたり、ドーヴァーに到着したのは、午後三時半すぎのことである。

それより直ちに汽車にのり、英都にむかい、夕方六時すぎロンドンのヴィクトリア駅に着いた。

駅舎には、ホテルのほうから案内人が馬車をもって迎えに来ており、一行は同人の案内で旅宿の「ランガム・ホテル」に入った。

これは、ヴィクトリア朝の代表的建造物であり、一八六四年に三十万ポンドを費して完成した、客室数六百、七階建の堂々たるホテルである。

同ホテルは、ポートランド広場にいまもあり、街路をへだててB・B・C（イギリス放送協会）の建物がある。

柴田はこのホテルについて、「旅亭の結構（しくみ）、巨大美麗、パレイのグラントホテルに彼は伯仲せり」（「仏英行」）とのべている。一行はホテルに入ると、早くもその到着を待ちかまえていたかのように、横浜のオランダ人商人キエールがやって来て、柴田と面会し、こんど長崎のイギリスの代理領事に任じられた、と語った。

ちなみに、パリからロンドンまでの旅費は、約六四六フラン、荷物の運賃は約一三五フランかった。

翌日、柴田はイギリス外務省に使いをやり、ロンドンに到着したこと、外相クラレンドンに面談したい旨を書簡をもってつたえさせた。富田・小花・福地らは、パリでエラル（銀行家）にたのんで為替にした御用金を受けとりに、イングランド銀行におもむいた。

柴田は持参した「日の丸の旗」をホテルの軒先にかかげさせ、また馬車を一台、雇い入れた。

この時期、ロンドンの気候は、パリよりも温暖であり、摂氏一四、五度ほどであった。しかし、いちばん困ったのは街が霧とスモッグにおおわれ、視界があまりよくなかったことである。

空はどんよりとくもり、うっとうしい。おまけに日中でも街は暗いときている。とくに冬場、午後四時ごろになると、街頭にガス灯がともる。

ホテルの部屋のなかで、なにか書きものをするときは、灯火を用いねばならなかった。

二十三日（一二・一〇）、日曜日であった。外相から返書が来るはずもなかったので、柴田は、富田・小花・小使たちを連れて、ロンドン名物のひとつ、チームズ川のトンネルを見物に出かけた。

俗に「ランドン・タンヌル」とも呼ばれる、ロンドン・ドック付近の南側につくられたこの地下道は、一八四二年から四三年にかけて完成し、一八六〇年代に東ロンドン鉄道に売却された。もともと車両の通行のために造られたものだが、財政難から傾斜路をつくることができなくなり、六〇年代まで歩行者のための地下道として用いられた。

やがて東ロンドン鉄道に売却されてからは、地下道鉄道が走るようになった。

地下道の長さは一二〇〇フィートあり、馬蹄のかたちをしたアーチ道が二つあった。

二十五日（一二・一二）、ロンドンでは、霧におおわれた。柴田は富田・小花・塩田らをとめない、大英博物館（一七五三年創設）を見学におもむいた。

英外相クラレンドン（一八〇〇～七〇）との面会は、明日ときまった。が、ヴィクトリア女王の所在をたずねたところ、ロンドンにはおわさず、離宮ですごしていることがわかった。

翌日、午後三時半、柴田は随員を何人かしたがえ、外務省にクラレンドンをたずねた。

このとき柴田は、ヨーロッパに派遣された趣きをつたえ、さらに贈物の目録および国書などを手わたした。

二十七日（一二・一四）、水品は柴田の命をうけて、八官庁および六カ国（ロシア、アメリカ、オランダ、プロシア、ポルトガル、スイス）の公使館をおとずれ、柴田の名刺を投じた。帰途、ハイド・パークを一周して帰館した。翌日、柴田は御用状を二通、外国奉行菊地伊予守、フランス公使館付のカシヨン神父宛の書簡などの郵送をパリにいたるエラーにたのんだ。

富田・小花・塩田ら三名は、リージェント公園におもむき、動物園などを見学した。

二十九日（一二・一六）、午前十時半、柴田は塩田をしたがえ、フランス公使館を表敬訪問し、その帰途、公園（場所不明）などを一周してホテルにもどった。

この日はじめて英^{イギリス}國陸軍工兵隊^{工兵隊}の工兵少佐ブライン少佐が外相クラレンドンの紹介状をもって来訪し、柴田一行の案内係になったことをつたえた。

同人は、一見ひょうひょうとした士官であつた。

翌日、宮内大臣をはじめ、ロシアおよびアメリカ公使館から館員などがやってきて、答礼の名刺をおいていった。

外相クラレンドンの命をうけたブライン少佐は、朝夕の各一回ずつ、ホテルに顔をだし、一行の用を足したり、訪問先の案内や手順について説明してくれることになった。この日、かれは友人である士官二名をとまってやって来、柴田と面会した。

ブラインが友人をつれてきたのは、どうも日本人をなかまに見せてやるためであつたようだ。小花・福地らは、許可をえて散歩にでかけた。

十一月一日（一二・一八）、ロンドンには濃霧である。日中でも空は、まるで夜のように暗い。

午前十時ごろ、案内人のブライン少佐がやってきた。柴田は従者ふたりを残し、随員六名とともにブラインの案内でウリッジにおもむいた。

ウリッジはチームズ川南岸に位置する、守備隊駐屯の町である。ここは王立造幣廠をはじめ、兵器廠、造船所などがあることで知られている。

柴田ら八名は、チームズ川を蒸気船でくだったものか。ロンドンからウリッジまで一時間半ほどかかっている。

一行のウリッジ訪問の大きな目的は、同地にある「王立造船所」を見学することである。この造船所は、ヘンリー八世によって造られ、一八六九年に閉鎖された。

ウリッジに着いた一行は、まず船中にボイラーを入れたり出したりするとき用いる蒸気起重機を見たのち、「軍用専らもっぱらの鉄船」を見たという。

これはおそらく鉄製の軍艦を見学した、という意であろう。柴田は艦名その他について、日記に何も記していないが、『サ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』紙（一八六六・一・一〇付）には、つぎのようにある。

十二月十八日、かれらはウリッジの造船所を視察し、女王陛下の艦である「プリンス・アルバート」と「ブラック・イーグル」号をくわしく調べた。

一行はそれより造船所内で、船中で用いるロープを作っている作業場、帆縫所、諸具置場、ドック、船の修理所、鋳物工場、蒸気釜製作場、小道具製作場などを見学した。

帰途、ブライン少佐がその会員である、「陸海軍クラブ」（セント・ジェームズ公園にちかい）をおとずれた。

これは一八三七年に創設された陸海軍の士官のためのクラブで、ボール・メールの三十六番地から三十九番地にかけてある石造りの堂々たる建物である。当時の会員数は、千数百名ほどであった。

各部屋には暖炉があり、図書室やレストランをそなえ、会員は昼夜なく、出入りができたが、宿泊の施設だけはないかった。

一行はこのクラブを見学したのち、六時前にホテルにもどった。

翌日、午前十時ごろ、ブライン少佐がシドニー・ロコック（江戸のイギリス公使館付書記官）をともない、ホテルにやってきた。ロコックは、きょう一日、みなさんのお供をしたい、といった。

ブライン少佐らはまだ朝食をとっていなかったものか、紅茶とパンを摂り、十時半ごろ柴田一行とともに馬車で「タイムズ」新聞社を訪れた。

これはいわゆる「ロンドン・タイムズ」と呼ばれる新聞社のことだが、一行はここで一分間に二五〇枚刷るという凹板の印刷機で、じっさいに新聞が印刷されるようすを見、さらに凹板の鋳型・紙型などを作っている部局、新聞の販売所などものこらず見学した。

当時のタイムズ社の社員の数はおよそ四百名、昼は百名ほどの従業員がいそがしく立ち働いていた。

当時の新聞の値段は、一部二、三ペニー（一ペニーは邦貨約六〇文にあたる）であった。

ついで一行が訪れたのは、スレッドニードル街にある「イングランド銀行」である。

これは一六九四年に創立されたという銀行で、ロンドン橋からも近い、石造りの堅ろうな建物である。ここでは紙幣が器械によって刷りあがってゆく過程や金銀の硬貨をつくるとき用いる材料貯蔵室なども一見した。

来客芳名簿に署名をもとめられ、それをめくっていたとき、はからずも日本人の氏名を発見した柴田は、それをメモした。

一八六四年一月二十二日

志道^{しじ}聞多

野村弥吉

山尾庸三

遠藤謹介

伊藤春輔

柴田は気づかなかったであろうが、これらの日本人は、すべて長州藩の密航イギリス留学生であった。つぎに年月日の記載なく、つぎのような氏名がみられた。

石垣銳之介

関 研蔵

高木政一

後者の三名も、薩摩藩の密航イギリス留学生であり、石垣銳之介とは、新納刑部久脩の変名である。関研蔵は、本名を五代才助といい、高木政一（政次、政二ともかく）は、堀莊十郎のおなじく変名であった。

そのあと、一行はロンドン塔の南にある「王立造幣局」をおとずれた。

この造幣局は、一八一〇年から翌十一年にかけて、ジョン・ジョンソンとロバート・スマーク卿によって建てられたものである。

ここでは金銀銅をうすく延べ板にし、さらにそれを丸く打ちぬき、歪みなく平らにしたり、貨幣の表面に刻印する部局などを見学した。

柴田だけは同所をおとずれた記念に、洗足日（貧民の足をあらう）の御下賜金として鑄造される二ペンス銀貨を五

枚と銅貨数枚を贈られた。

一行は夕方五時すぎ帰館した。

三日（一二・二〇）この日、福地をのぞく全員が視察にでかけた。

もと陸軍大尉のブレークリーは、いまグリニッジで兵器工場オードレンス・ワークスを営んでいるのだが、ブライン少佐とともにホテルまで迎えにきた。

昼すぎ、一行は馬車に分乗すると、グリニッジ（ロンドン東部、チームズ川右岸）にむかった。ここはこんにちグリニッジ天文台、快走帆船カッティサーク号が保存されていることで有名であり、ロンドンの観光名所のひとつとなっている。

ブレークリーは、アームストロング砲より便利な大砲を発明したことで名をなし、グリニッジに大きな兵器工場をつくった。工場をおとずれてみると、それは街中の雑踏するところにあった。砲身をおもにつくっており、サツマ人から車付の野砲一門の注文があり、それがほぼ完成した、との話がでた。

ついで「王立取引所ロイヤル・エクスチェンジ」をおとずれた。この建物は大火により二度焼失し、現在のものは一八三二年から四四年にかけてウィリアム・タイトによって造られた。が、いまここで取引業務はおこなわれていない。

一行はここで取引のようすを一見した。屋内には電報局が備えられており、その通信網によって世界各地の時候・晴雨・物の相場まで知ることができるようになっていた。

兵器工場主のブレークリーは、同所まで一行に随行し、やがて帰って行った。

そのあと一行は、「ロンドン塔」（チームズ川左岸）にむかった。これは城壁でかこまれた五角形のとりである。かつては王宮・国事犯監獄・造幣所・武器庫として用いられ、歴代の王冠・宝石類などが展示され、いまも大勢の見

物人を呼んでいる。

柴田は文久遣欧使節団の随員として渡英したとき、同所をおとずれており、これが二度目の訪問である。

つぎにおとずれたのは、「ロンドン・ドック」(ロンドン塔の東に位置)である。このドックは約百エーカーの地に、一八〇五年に四百万ポンドの巨費を投じてつくられたもので、チームズ川の三つの出口から入船でき、ため池(係船水域)には四百隻まで収容できた。

一行はここで、茶や酒類の保税倉庫を見学したが、その巨大な建物と施設に一驚を喫した。すでに日が傾きかけていたので、各ドックや蒸気によって開閉する小橋などを見学するひまはなく、夕方の五時すぎホテルにもどった。

翌日、午前十時ごろブライン少佐がやってきた。かれはこれまで日本使節が視察におとずれた先々で世話になったひとびとを食事に招くため、人数や招待状などを調べた。

イプスウィッチの農具製作所(「ランサム・アンド・シムズ」社の社長が来訪し、柴田と会々と、その工場を見てほしい、といった。

午後二時すぎ、柴田は水品をのこし、残りすべての随員をしたがえ、ブライン少佐の案内で「チェルシー王立廃兵病院」(「王立廃兵病院」)と「陸海軍孤児院」をおとずれた。

チェルシー王立廃兵病院は、チームズ川北岸のロイヤル・ホスピタル街にある老兵のための病院であり、一六八二年チャールズ二世によって創建された。

それは石造りの堂々たる建物であり、当時六百名ほどの老兵が収容され、各部屋は暖炉をそなえ、医師および看護婦の詰所、読書室なども完備されていた。

一行はこの病院で、老院長(八十三歳)より紅茶・コーヒー・菓子などのもてなしをうけた。

そのあと陸海軍孤児院をおとずれた。同所は兵士の孤児（五歳から十四歳まで）を収容している施設であり、当時五百名ほどの子どもたちが収容され、学問をし作業をまなんでいた。

さいごに訪れたのは、地下鉄道である。一八六三年に完成し、バディングトンからファリングトン街までの四マイルの地下道を蒸気車が走っていた。工事費は、一マイルにつき五十万ポンドがかかったらしい。

客車内はガス灯によって照らされ、夜は十二時になると終業した。地下道のそこかしこに採光口がみられた。

午後六時すぎ、帰館。ブライン少佐より、世話になったイギリス人を招いて宴を催すことを勧められた。

五日（一二・二二）、午前十時前にブライン少佐がやってきた。

柴田一行は、荷物の半分をホテルにあずけ、午前十時に馬車で旅宿を出ると、ウォータールー駅にむかった。同行者はブライン少佐のほか、プリマスに勤務する士官一名（チュルシー王立廃兵病院院長のむすこ）である。

一行は十一時発の汽車にのると、ポーツマスにむかった。ポーツマスは、ロンドンの南西一九キロに位置し、イギリス海峡に面した、イギリス有数の軍港がある港町である。当時の人口は、九万四千ほどであった。

一行は、サウスウエスタン鉄道の汽車にゆられ、南下すること約四時間半、午後二時半ごろポーツマスに到着し、ただちにホテルに入った。

午後四時ごろ、柴田らは小花をホテルにのこし、ブライン少佐に案内されて、造船所をおとずれると司令官と会い、あいさつした。

やがて副官ケックニーの案内をうけ、構内に入ると、建造中の甲鉄艦「ロイヤル・アルフレッド」号をおとずれ、こまかに見学し、それより諸所をみてまわった。

宏大な敷地のなかには、ドックや係船水域がいくつもみられた。視察ちゅう柴田は、先年竹内使節団の随員として

ヨーロッパに來たとき、アレクサンドリアからマルセーユまで乗ったヒマラヤ号の海軍大尉とはからずも再会した。ヒマラヤ号は、折からドックで修理中であつた。一行は造船所を一見し、午後六時ごろホテルにもどつた。

夕食には副官とヒマラヤ号の海軍大尉が招待され、兩人は柴田からキセルと錦絵を贈られ、夜十時ごろ歸つて行つた。

翌日、午前十時ごろ、昨日の副官がやつて来て、一同をふたび造船所に案内した。司令官は不在であつたので会えなかつたが、その家族と会つた。

それより一行は、構内の各部署の視察をはじめた。器械を用いてロープをつくっている三階建の建物を手はじめに、製材所・蒸氣（動力）小屋・溶鉱炉・鍛冶場・鑄形置場・蒸氣釜製作所・小道具製作場・鉄板（甲鉄艦用）製作所などを、ひとつずつ見てまわつた。

それより五本マストの砲塔をそなえた甲鉄艦「ミノートル」号（長さ百フィート、幅五十フィート、備砲十六門、乗員七百名）を見学し、水夫らによる射撃の操練をみた。

午後一時半ごろ、司令官宅にもどると、昼食のもてなしを受けた。居間に日本の陶器がいくつかかざられていた。柴田はもちあわせていた木彫の扇を子どもにあたえた。三時すぎ、ホテルにもどつた。

旅宿にもどると、ブライン少佐より、造船所の技師（工兵科士官）が図面をもって説明にくるので、食事をだしてほしい旨の申し出があつた。柴田はすこし心にひっかかるところがあつたが、晩さんに招くことにした。

夕食には、この技師のほか、かつて下関砲撃に参加したタルタール号のいまの艦長夫妻などが招かれた。

七日（一二・二四）、日曜日につき、見学はなかつた。ブライン少佐は、明日はクリスマスであるけれど、砲台にご案内したい、といった。

富田・小花・塩田ら三名は、馬車でドライブに出かけた。このとき馬車を十台ほど連ねたジブシーの一行をみかけた。

翌日は、^(クリスマス降誕祭)クリスマス降誕祭につき、ホテルでは夕方よりダンス・パーティがあり、ボーイや女中らも参加することになった。イギリスでは、宿泊客からかれらに対して祝儀をだす風習があるので、シャンペンを出してほしい、とブライン少佐がいうので、柴田は十二本ばかり贈った。

午後一時すぎ、昨日やってきた技師の案内で、柴田は水晶をひとりのこし、随員のすべてとブラインとともに砲台見物に出かけた。

まず砲兵隊の馬屋^{うまや}（二階建、一階は馬屋、二階は兵士の居室）や練兵場などを一見した。

ついで海岸に沿って何カ所かある砲台をおとずれた。砲台は天然の石山を掘りさげて造ったもので、三階建の家屋ほどの規模であり、ふだんは三百名ほどの兵が詰めている、ということであった。大砲の数は五十数門、火薬は八十たる備え、戦争のときは八百八十たるほどたくわえておくという。

たまたま砲台建造係の士官がやってきたので、一同その士官宅に招かれ、ビールなどをごちそうになった。そのとき故国日本のニュースを聞いた。

この日から三十日前（慶応元年九月十六日＝一八六五・一一・四）、英米仏蘭の公使らは、軍艦九隻をひきい、兵庫沖にいたり、幕府に大坂と兵庫（神戸）開港を迫ったが、おもい通りにゆかず、軍艦をひきいて横浜にもどった事件である。

帰途、馬車ごと渡し舟にのり、五時半すぎホテルにもどった。

旅宿では、クリスマスにつき、ホテルの主人や召使いたちによるダンスパーティが催され、使節のみなさんも参加

してほしい、と勧めるので、一同服装をあらため、舞踏室に行き、イギリス人らとダンスをした。

九日（一二・二六）、午前十時半、一行はホテルを出るとポーツマスの駅におもむき、十一時発の汽車でプリマスにむかった。

途中で汽車を二度ほど乗りかえ、夕方六時半ごろプリマスに着くと直ちにホテルに入った。

プリマスは、ロンドンの西南西三六四キロの地にあるイギリス海峡に面した港町であり、デボンポールトとストーンハウスは、十七世紀以来の軍港として知られている。

岡田撰蔵の「航西小記」によると、市街はロンドンより清潔なうえ、にぎわっており、人口は十二万ほどであったという。

ブライン少佐の家族と同人の親友の夫人か姉妹らしきものがホテルに来ており、柴田と会った。が、ブライン少佐はかれらに日本人をひとめ見せるために呼んだもののようにおもえた。

翌日、柴田はブライン少佐の家族がおなじホテルに投宿していたので、塩田に命じて、絹布と扇などを贈った。

この日、ブライン少佐の上官であるオーウェン陸軍大佐がホテルにやって来、柴田と面会した。午前十時すぎ、カゼをひき床についている富田をのぞき、一同馬車でデボンポールトへむかった。

まず士官および兵卒が居住する「ラグラン兵舎」を訪れ、同所の長にあいさつし、名刺をあたえた。それより海軍提督宅にむかい、同人と面会し、案内の士官をえて、防波堤（プリマス・ブレイカ）を見学することになった。

「日の丸」の旗をかかげた蒸気船が一隻用意されており、一同、それに乗ると沖にむかった。

防波堤は、海岸から十二、三キロのところにある。長さ一マイル、高さ四二フィート、厚さ二二フィート、堤頂部の平らなところは、五十フィート。工事に四十年かけ、百五十万ポンドの巨費を投じたという。

この堤の外は、波が荒く、満ち潮のときは波が堤のうえまで打ち寄せるため、ところどころに浪沫をさける場所が設けてあった。堤の破損は、年々すすみ、その修理費もばかにならないという。

防波堤を見たのち、一同ふたたび蒸気船に乗り、港にもどった。

ついで一行が見学したのは、デボンポートとストーンハウス地区とをむすぶ「アルバート橋」（現・クマール橋）である。

これはヨーロッパ第一と称する鉄橋であり、長さが二二四〇ヤード（一ヤードは三尺）、高さは二二〇フィートあった。橋のうえに線路が敷かれており、そこを蒸気車が往来し、橋の下を軍艦が行き来していた。

一同、蒸気船から、その橋を見あげ、その堂々としたすがたに目をみはった。

その後、一行は上陸すると、デボンポートにある造船所に行き、海軍提督宅をおとずれ、提督と家族らと会ったが、ビールなどをすすめられた。

それより提督の案内をうけ、トンネルを通過してモリスタウンにある「キヤム造船所」をおとずれた。ここにはドックが三つ、係船水域が二つ、その他各種の工場などがあり、それらを一見した。

午後四時すぎ、ホテルにもどった。夕食に案内の士官および蒸気船の船長らを招いたが、士官のほうは差しつかえがある、といって招待をことわり、船長だけがやってきた。

ブライン少佐より、芝居を観たり、ホテルにおけるダンスパーティーに出席するよう勧められたが、一同それを固辞した。

十一日（一二・二八）、前夜、夕食に招いた蒸気船の船長が家族をつれてホテルにやって来、柴田らと会ったが、これはどうも家族に日本人をみせるための主意にはかならなかった。

柴田は、じぶんたちが見世物になっていることを百も承知しており、あまりゆかない気分ではなかったようだ。「にくむべし」と日記にしている。

柴田はプリマスを去るにあたり、オーウェン陸軍大佐と同人の家族らと会い、別れをつげた。午前十時ごろ、一同プリマスのホテルを出ると、駅にむかい、そこでしばらく汽車を待ち、十一時十五分発のグレート・ウエスタン鉄道の汽車でロンドンへの帰途についた。

ロンドンのパディントン駅に着いたのは、夜七時すぎのことで、直ちに馬車でランガム・ホテルにむかい、ふたびそこに入った。

ホテルには、肥田浜五郎とオランダ人の器械技師一名がきており、柴田と会った。このとき、先年幕使がヨーロッパにやって来たとき持参した品々のうち、不用になったものをオランダ人宅にあずかってもらっていたが、それを幕生の教師らに下げわたすよう取りはかってほしい、との留学生取締・内田恒二郎からの言づてを聞いた。

また買いあげた器械類の運賃が不足しているので、御用金のうちから、一万四千ドル支出してほしい、との話があった。

日本使節のイギリス滞在も残すところわずかとなったので、今晚から当ホテルに泊りたい、とブライン少佐がいった。また視察旅行ちゅうに、故国から御用状や御沙汰書、さらに外国人との往復書簡、外交交渉の対話記などが届いていた。

翌日、柴田は富田と塩田をともない、ブライン少佐の案内で「ウエストミンスター寺院」と「国会議事堂」をおとずれた。

柴田にとっては、これら二つの建物は、先年、竹内使節団の随員としてイギリスに来たとき、見学したところであ

り、これが二度目の訪問である。

ウエストミンスター寺院では、王室のひとびとや政治家や芸術家の墓碑や記念碑などを見てまわったが、一行のためにオルガンが演奏された。

国会議事堂では、上院と下院のそれぞれの議場、および各部屋、女王出席の間、食堂、図書室などを一見し、午後四時すぎいったんホテルにもどった。

その後、柴田は水品と福地を連れてふたたび外出すると、外務省をおとずれ、外務次官エドモンド・ハモンドと会い、諸所を見学できた礼をのべ、御用状にたいする返書をもとめたりした。

同夜、ロンドンやボーツマスやプリマスにおける各施設を視察した際に世話になった、主だった者を招待しての晩さん会が催され、二十七名が出席した。宴は夜十一時ごろおわり、散会した。

柴田が主催したこの夜の宴会について、『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』紙（一八六六・一・一〇付）は、つぎのような記事をかかっている。

（大意）

十二月二十九日の晩、柴田閣下はランガム・ホテルにおいて、大勢の陸海軍の士官や使節一行がおとずれた諸施設と関係がある紳士らのために宴会を催した。日本人のいんぎんさはつとに知られているが、理事官は、ひじょうにうやうやしい態度で、来客をひじょうに温かく、親切に迎えた。その折、ブライン少佐に手伝ってもらった。

晩さんは申し分のないものであった。宴が夜おそくおひらきとなったとき、客を呼んだ側も呼ばれたほうも、互いに満足げなようだった。

三十五名がテーブルにつき、その中にはつぎの顔ぶれがあった。

將軍J・バーゴイン卿、ロンドン塔の管理長官でバース大勲位授与者であるバート、チェルシー病院の医学士で陸軍大佐である

J・ウィルソン卿、ウリッジ造船所の所長であるタンロップ准将、造幣局の所長、ホインパー大佐（ロンドン塔）、陸海軍孤児院の所長であるアダムズ大佐、イギリス海軍に所属する飛竜^{フライング}号の医学士であるバーゴイン大尉、G・ロツリー大尉（副官）、日本公使館付書記官のシドニー・ロコック氏、海軍省長官のブリッグズ氏、イングランド銀行の総裁ホーレイ氏、メトロポリタン鉄道の総支配人であるマイルズ・フエンストン、『ロンドン・アンド・チャイナ・テレグラフ』紙のライト氏、ロンドン・ドックの長官バイス氏などである。

なお、招待されはしたが、出席できなかった者は、つぎの面々である。

イングランド銀行の副総裁で、バース大勲位授与者で将軍のA・ウッドフォード卿、『タイムズ』紙のサイモンズ、ブーラー中將、提督のマイケル・セイモア卿、大佐のウイリアム・ゴードン卿など。

柴田日向守閣下と主席秘書官のミズシマは、一八六二年にわが国をおとずれた一行のなかにいたことは、案外知られていないよううだ。

かれらはその年の万国博覧会のすばらしさを鮮明におぼえている。けれど今回のイギリス訪問をひじょうに興味ぶかく、かつ有益なものとする、数多くの珍しいものや進歩の証拠をいくつも見いだした、と語っている。

十三日（一二・三〇）、ボーツマスの造船所をおとずれたときに案内してくれた副官ケックニーは、前夜からランガム・ホテルに宿泊していたのだが、この日の朝、柴田とおなじテーブルにつき、ブライン少佐とともに朝食をとった。

午後一時半すぎ、柴田は塩田をともない、ブライン少佐とケックニーの案内で「ミルバンク刑務所」を見学におとずれた。

これはロンドン最大の刑務所であり、テムズ川畔の湿地帯七エーカーの地につくられた星形の三階建の建物である。男女千二百名ほどの囚人を収容することができた。

一八二一年に建物は完成し、一八九〇年に閉鎖され、一九〇三年に取りこわされた。その跡地に「王立陸軍軍医学校」が建てられた。

刑務所であるため建物は堅牢につくられており、囚人は男女べつにわけられ、ひとりづつ独房に入れられる。そして罪の軽重により、土木工事に駆りだされたり、靴やカバンをつくったり、機を織ったり、縫物などの労働にしたがうのである。

刑務所の外観は、冷たく、重苦しい印象をあたえたようだが、屋内には調理場・浴室・洗たく場・病院・遊歩場などが備えられていた。

囚人は毎日、つぎのような食物の配給をうけた。

パン……………二〇オンス

肉……………四オンス

じゃがいも……一ポンド

日曜日には、肉はあたえられず、代わってチーズがくばられた。

刑務所見学のあと、一行は「ウィリアムソンの刀剣工場」をおとずれた。これは政府御用達の小さな工場であった。ようで、サーベルの強度から刃味まで調べ、出荷していた。四時すぎ、一同はホテルにもどった。

先年幕府の遣欧使節団（竹内下野守一行）を江戸からスエズまで運んだ英艦「オーディン」号の軍医がホテルにやってきて、柴田と再会した。両人はビールを飲みながら歓談して別れた。

十四日（一二・三一）、この日は洋暦の大晦日にあたる。街のようすは、なんらふだんと変わるところがない。一般のイギリス人の家庭では、家族または近親者があつまって酒を飲み、語りあうだけである。

富田と小花は、散歩にでかけた。またイギリス外務省から、一月三日の午後に来訪りたい、との書簡が届いていた。

*

十一月十五日（一八六六・一・一）、年があらたまって洋暦の元旦である。

柴田は小使のシャルルから、年賀として革製のサイフを贈られた。午前九時水品と塩田を留守番とし、のこりの随員をしたがえた柴田は、ブライン少佐の案内でイプスウィッチにおもむくために、馬車でリバプール駅にむかった。

駅でしばらく汽車を待ったのち、十時発の汽車でイプスウィッチにおもむいた。イプスウィッチは、ロンドンの東北東一一キロに位置する、人口三万五千ほどの町である。ここにある「ランサム・アンド・シムズ農機具工場」を見学するのが、大きな目的であった。

一行をのせた汽車は、平坦な麦畑を走ること約二時間、お昼ごろ目的地に着いた。

駅舎で一行は、ランサム・アンド・シムズ社の社員に出迎えられ、直ちに馬車にのると、会社に向かった。この会社は、一七八九年の春——バリのバステューユの牢獄が民衆に占拠される数か月前に——、ロバート・ランサムによって設立された小さな鉄工場を母体として発展し、今日にいたっている。

当時は農機具のほかに、鉄道用の踏切や転轍機、ボルト、カンヌキなどもつくっていた。柴田がこの町をおとずれる気になったのは、十一月四日に旅館のほうまでわざわざ社長がやってきて、ぜひ工場を見てほしい、といったから

である。

工場の規模は大きく、オウエル川の河畔にあった。柴田によると、官営の工場のようなであったという。一行は製鉄所や鑄造所、鋳型をつくっている所などを見てまわってから、各種の農機具（写真参照）——畝をつくる器械（鋤）、じゃがいもを掘る器械、わらを寸断する器械、麦や豆などを粉碎する器械（脱穀機）などを見学した。

これらの農具は、すべて蒸気を用いず、手でうごかすものであった。

見学をおえた一行は、広大な庭園に取りかこまれた社長の家に案内され、家族一同から昼食のもてなしを受けた。ついで一行がおとずれたのは、「パテント・コンクリート・ストーン会社」である。

これは「人為を以て石を造り出せる製工所」（「仏英行」）ということだから、コンクリート工場のことであろう。ふつうの土砂に葉種を調合したもの（セメント？）に水をくわえると、たちまち随意的石ができあがるのを見て、柴田らはきもをつぶした。

一行はコンクリートの製法をしるした本を贈られたのち、駅にむかい、午後四時の汽車でイブスウィッチをあとにした。

ロンドンの旅宿にもどったのは、夜七時半ごろのことである。

翌日、午前十一時柴田は、小使いの休左衛門と平七をのこし、ほか一同をとめない、ブライン少佐の案内でリージェント街にあるハーバート・ワトキンス氏の写真館にでかけ、めいめい肖像写真をとった。

そのあと「南ケンジントン博物館」と「園芸協会」にむかい、そこで陶器や油絵、船の模型、ガラス器、草花などを見学し、午後四時ごろ、ホテルにもどった。

五時半すぎ、ふたたびブライン少佐の案内で外出すると、「剣法道場」を一見したという。これは「ロンドン・フェ

ンシング・クラブ」を訪れたということであり、見物をおえた一行は、夜七時ごろホテルにもどった。

同夜、富田と福地、小花と塩田らは、それぞれふたり一組となって散歩に出かけた。富田と福地は、どうも街娼に声をかけられ、私娼窟に足をふみ入れたかもしれない。

柴田は日記に、「達三は源一の私交事件に附添へるなり」としているからである。

十七日（一・三）、小花と塩田は、為替の件で銀行に行った。

午後二時半、柴田は水品と塩田をともない外務省に外相クラレンソンをたずねると、これまでの世話にたいする礼をのべ、かついとまごいを告げた。また返書をいただきたい、と述べると、すでに日本に発送済みだといった。それではその写しを拝見したい、という、すぐには用意ができないので、いずれパリのほうに郵送するつもりである、との回答をえた。ついでハモンド次官にも面会した。

ホテルにもどってから、柴田はブライン少佐に現金で応分の謝礼をし、イギリスまで付けてくれたシャルには一両小判をあたえた。

またタイムズ紙社の社主には、約束どおり和紙を、イブスウィッチの農機具工場の社長には肖像写真をそれぞれあたることにし、ブライン少佐を通じて贈ることにした。

パリにいるヴェルニーから、塩田宛の手紙がきており、それには帰国のさいの郵船のへやわりのこと、宿はグラントテルとし、へやを予約したことなどが書かれていた。

慶応元年十一月十八日（一八六六・一・四）、午後七時前、柴田一行はランガム・ホテルを引き払い、馬車でヴィクトリア駅にむかった。

駅には小使いシャルルのすがたは見られなかった。同人は駅をまちがえ、荷物とともに別な駅におもむいたようだった。行きちがいになったのである。

シャルのことは、案内係のブライン少佐にたのみ、一同、七時半発のロンドン・チャットナム・ドーヴァー鉄道の汽車で、ドーヴァーにむかった。九時すぎドーヴァーに着き、ここでブライン少佐にいとまごいを告げ、直ちに蒸気船に乗った。

船中では、たまたまパリのイギリス公使館へ出張する、ロコック書記官と会った。同人は、ブライン少佐から、日本人一行の世話をたのまれていたようである。

この日、イギリス海峡は、荒れもようであった。風浪が高く、航海がおもいやられた。

安のじょう、出帆し、沖にでると、船ははげしくゆれだした。二時間以上も、よたよたと激しく荒れ狂う海をすすみ、お昼すぎ、ようやくカレーの港に着いた。

そのころには、ようやく嵐が、おさまっていた。一同、船にゆらればなしであったから、疲労こんばいしており、暖かな茶をのむ気力もなく、すぐにパリ行の汽車にのった。

パリの北駅に着いたのは夕刻の六時すぎのことである。駅ではヴェルニーが馬車を用意し、一行を出迎えた。……

〔資料 一〕

“*The London and China Express*” (Vol. VII.—No. 195, London, Tuesday, Dec. 26, 1865). 柴田一行が日本人係のブライン少佐の世話をうけ、ロンドンおよびボーツマスなど、各所を訪れたことを伝える記事。

THE JAPANESE COMMISSIONERS. — The party has been placed under the care of Major Brine, who has shown them the lions of London, Portsmouth, &c. On the 29th they will give a banquet previous to returning to France — p. 1059.

前途の日付におなじ。

英國陸軍工兵隊のブライン少佐が、柴田一行をロンドンの各所に案内したことを伝える記事。

THE JAPANESE VISITORS.

MAJOR BRINE, Royal Engineers, has been appointed by the Earl of Clarendon to take charge of the Japanese party (ten), reported in our last as having arrived from France. Amongst other novelties in this country, they have visited the Woolwich Dockyard, Lloyd's, the Royal Exchange, the Mint, the Tower, The Times office, Blakely ordnance factory, the London Docks, Royal Hospital Chelsea, and the Bank of England. On the 21st they started for an inspection of the dockyards, &c., at Portsmouth and Plymouth. They will give a banquet at the Langham Hotel on the 29th.

"*The London and China Express*" (Jan. 10, 1866).

ロンドンの東北東一一キロに位置するイプスウィッチの町を訪れ、「ランサム・アンド・シムズ農機具工場」を見学したことを伝える記事。

イギリスを訪れた目的、各種の農器具を見たときの様子などについてふれている。とくに一行は耕作用の牽引車に注目したとある。

VISIT OF THE JAPANESE COMMISSIONERS TO IPSWICH.—On the 1st inst. the extensive agricultural implement works of Messrs. Ransomes and Sims, at Ipswich, were visited by these distinguished Japanese gentlemen, who are commissioned by their Government to inspect the principal industrial establishments in this country, and to report upon the various kinds of machinery most suitable for introduction into the dominions of the Tycoon.

The party comprised Shibata Hiongano Kami, chief commissioner, and suite, accompanied by Major Brine, R. E., and Captain Mason, R. N., and on their arrival at the manufactories the various agricultural operations of thrashing, grinding, ploughing, and irrigating by steam-power were exhibited and explained to them; several small machines specially adapted to the produce of the East and Japan were also

shown, and elicited numerous comments, which displayed that keen and intelligent observation for which the Japanese are so well known.

A new traction engine, combining the most recent improvements for agricultural purposes, was the subject of marked attention. After taking lunch at the residence of the senior partner, Mr. F. A. Ransome, the party were conducted to the Patent Stone Works, where they were much astonished to see sand transformed into hard stone in a few minutes, by Mr. Frederick Ransome's ingenious process. They expressed themselves as highly satisfied with all they saw in Ipswich.

〔續纂 三〕

"*The London and China Express*" (Jan. 10, 1866).

柴田一行がイギリス到着後、娯楽や観光に時を費やすことなぐ、あつぱらうてちう役に立つ諸施設および興味をひく場所をおとずれたことを伝える記事。

とくにイギリス滞在ちうの訪問地の概略について述べてゐる。

OUR JAPANESE VISITORS.

His Excellency Shibata Hionga no Kami and suite left London for Paris, on the 4th inst., intending

to make a short stay in France, and leave Marseilles for Japan by the Messageries Imperiales steamer on the 19th instant. During a stay of barely three weeks in this country they have visited under the able guidance of Major Brine, a great number of national institutions and other places of interest, as will be seen by the following outline their itinerary.

It is worthy of remark that they have wasted no time in pleasure-seeking, or mere sight-seeing; their investigations having been strictly confined to objects of a useful and thoroughly practical nature. On the 18th December they inspected Woolwich Dockyard, examined Her Majesty's ships *Prince Albert* and *Black Eagle*, and visited the Army and Navy Club. On the 19th *The Time's* office, the Bank of England, and the Mint were visited. On the 20th, the Blakely Ordnance Works, the Royal Exchange, the Tower, and the London Docks. On the 21st, Chelsea Hospital, the Naval and Military Asylum, and the Metropolitan Railway. On the 22nd they proceeded to Portsmouth by the South-Western Railway, and went on board the *Royal Alfred* the same day. On the 23rd Portsmouth Dockyard was inspected, as also the iron-clads *Minotaur* and *Scorpion*. On the 23rd Hilsea Barracks, Fort Southwick, and Gosport were visited. On the 26th they proceeded by railway to Plymouth, and the following day visited Devonport, the Raglan Barracks, Plymouth Breakwater, and the Albert Bridge at Saltash; also the dockyards at Devonport and Keyham. On the 28th the party returned by the Great Western Railway to Paddington terminus, and resumed their former quarters at the Langham Hotel.

On the 29th they went to Westminster Abbey and the Houses of Parliament, and the following day to Millbank Penitentiary and Williamsons's sword factory. On the 1st of January they started for Ipswich, and there visited Messrs. Ransome and Sims' manufactory of agricultural implements, and the works of the Patent Concrete Stone Company. On the 2nd they visited Mr. Herbert Watkins, photographer, of Regent-street, and afterwards went to the South Kensington Museum, and the Horticultural Society's grounds, also to London Fencing Club. And on the 3rd, the day preceding their departure, his Excellency the Commissioner had a farewell interview with Lord Clarendon at the Foreign-office.

On the evening of the 29th December his Excellency gave a banquet at the Langham Hotel to a large party of naval and military officers, and gentlemen connected with the various institutions visited by the party. The Commissioner, who possesses in an eminent degree that courtly bearing for which his countrymen are noted, received the guests in a most hospitable and kindly manner, in which he was aided by Colonel Brine. The dinner was unexceptionable, and when the party broke up at a late hour it was evident that the entertainers and their guests were mutually pleased with each other. Thirty-five persons sat down to dinner, among whom were the following:—General Sir J. Burgoyne Bart, G.C.B., Constable of the Tower, Colonel Sir J. Wilson, C.B., Chelsea Hospital; General Hutt, C.B. Secretary, Chelsea Hospital; Commodore Dunlop, Superintendent of Woolwich Dockyard; the

Master of the Mint; Colonel Whimper (Tower of London); Colonel Adams, Secretary of the Naval and Military Asylum; Captain Burgoyne, C. B., H. M. S., *Wyvern*; Captain the Hon. G. Wrottesley, A. D. C.; Mr. Sydney Locock, Secretary of the Japan Legation; Mr. Briggs, Secretary to the Admiralty; Mr. Horley, Secretary, Bank of England; Mr. Myles Fenton, General Manager of the Metropolitan Railway; Mr. Wright, of the *London and China Telegraph*; Mr. Paice, Superintendent of the London Docks. Among those invited, whose engagements prevented their presence, were—Gen. Sir A. Woodford, G. C. B., the Governor and Deputy-Governor of the Bank of England; Mr. Simonds, of *The Times*; Lieut. General Buller, Admiral Sir Michael Seymour, and Colonel Sir Wm. Gordon.

It is not generally known, we believe, that H. E. Shibata Hionga no Kami, and Midzousima, the chief secretary, were among the party who visited this country in 1862. They have a vivid recollection of the splendours of the International Exhibition of that year, but state that they have found so many novelties and evidences of progress as to render their present visit most interesting and instructive.

[終幕 三]

"*The Times*" (Jan. 4, 1866).

柴田一行がイギリス訪問をおえ、フランスにもどるに先立って、外務省にクラレンドン外相を訪ね、いとまごいを

告げたいことを記す。

「これはイギリス王族をたぐひて、マナーナ島の領主へ送りつゝぬ。」

THE JAPANESE COMMISSIONER. —Yesterday afternoon his Excellency Shibata Hiogano Cami and suite paid a complimentary visit to the Earl of Clarendon, with whom they had an interview at half-past 2 o'clock at the Foreign-office. After calling upon the Earl of Clarendon, the party paid their respects to Mr. E. Hammond, Under-Secretary of State for Foreign Affairs. The Commissioner and suite leave the Langham Hotel at an early hour this morning, and, escorted by Major Brine, R. E., will proceed to the Victoria Station, Pimlico, whence they will travel by the London, Chatham, and Dover Railway to Dover, which will be reached shortly after 9 o'clock. On the 19th the whole party will embark at Marseilles for Japan, whither they will take back a very extensive collection of works of art, jewelry, specimens of various kinds of English manufactures, books, &c. It is understood that his Excellency is greatly pleased with the facility afforded by the Earl of Clarendon for the prosecution of his inquiries, and with the kind reception he has everywhere met with during his tour in the country.

Acknowledgement.

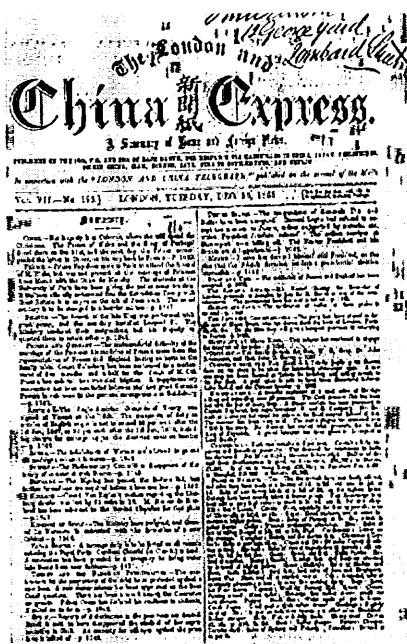
My grateful thanks are due to the Newspaper Library at Collindale, London, the Public Library at Ipswich, the Central Library at Waseda University, the Historiographical Institute (the University of

Tokyo) and the Japan Academy for permission to consult and copy relevant documents.

参考文献および資料

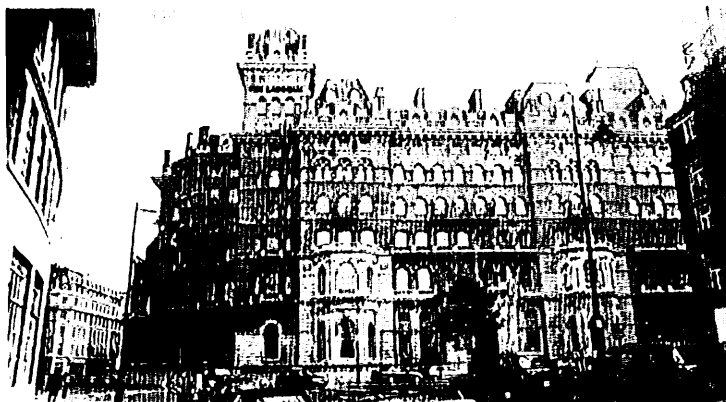
- 君塚 進校注「仏英行」(柴田剛中日載七・八より)(日本思想大系66『西洋見聞集』岩波書店刊、所収)
- 岡田拱蔵「西航小記」(写本(一)～(三))『東京大学史料編纂所蔵』、雑誌『旧幕府』所収
- 「柴田日向守 英仏行御用留」(原本(一)～(三))『東京大学史料編纂所蔵』
- 福地源一郎『懷往事談―附新聞紙実歴』(民友社、明治二十七年四月)
- 大塚武松『幕末外交史の研究』(宝文館、昭和二十七年七月)
- 野村兼太郎『維新前後』(日本評論社、昭和十六年四月)
- 緒方富雄『緒方洪庵伝』(岩波書店、昭和五十五年六月)
- Karl Baedeker: Great Britain—Handbook for travellers, Karl Baedeker, Publisher, London, 1910.
- Ben Weinreb & Christopher Hibbert: The London Encyclopaedia, Macmillan, London, 1983.
- Carol & Michael Weaver: Ransomes 1789~1989, A Bicentennial Celebration, Ransomes Sims & Jefferies, PLC Ipswich, England, The Lavenham Press Ltd, Suffolk, England, 1989.

イギリスにおける柴田日向守

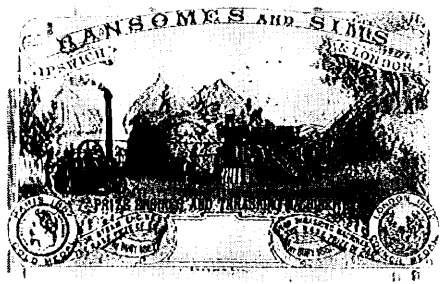
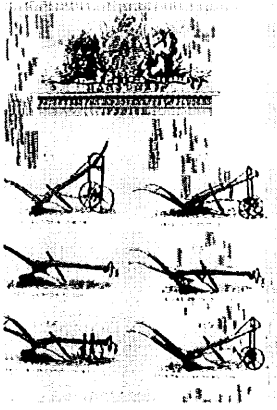


外国奉行・柴田日向守（剛中）
〔日本学士院蔵〕

柴田一行のことを記事にした『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』紙、X点がその箇所。



ロンドンの柴田一行の旅宿（「ランガム・ホテル」）
〔筆者撮影〕



ランサムズ・アンド・シムズ社の農器具
[IpswichのPublic Library蔵]

